

地域と小学校

—博多小学校を訪ねて—

別府大学文学部 人間関係学科

富吉素子

I はじめに

今回訪問した博多小学校は、福岡市博多区奈良屋町にある。JR博多駅から北へ車で10分。サンパレスや国際センターをご存知の方はそこへ至る道路沿いにある。現在の博多小学校の校区には5年前までは4つの小学校があった¹⁾。都市の過疎化・少子化の結果、それらの4小学校が統廃合してできたのが博多小学校である。平成13年度4月に新校舎入校式が行われた、まだ出来立てのピカピカの小学校である。100年余の歴史を閉じて4つの小学校は1つに統合された。新しくできた博多小学校はどのような小学校なのか、どのような理念のもとにつくられたのか、とくに、新校舎の建築様式と子どもたちの関係に関心を抱き訪問した。

ここでは、遠い別府からなぜ博多小学校の見学なのか、見学までの簡単な経過にまず触れ、博多小学校について概観する。つぎに、地域と小学校の歴史的関係、博多の町の過疎化と小学校の統廃合、それに対する地域の人たちの思いをたどり、ポスト近代の小学校が生まれ変わっていく変化を追った。

II 地域と小学校

2003年度前期、大学の社会学の講義において「コミュニティと小学校」²⁾のことを取り上げた。日本の小学校は小学生には開かれた空間である。校舎や体育館、プールまた、さまざまな道具や備品などがある程度、自由に使うことができる。し

かし、地域のおとなが自由に使える場所や施設が、徒歩15分以内のところにあるだろうか、というのがテーマであった。そういう条件がそろった地域はそんなに多くはないだろう。

しかし、そのような条件を満たした場所・コミュニティがアメリカにはあるという。そして、比較の対象事例としてあげられていたアメリカミシガン州フリント市のウィリアムズ・コミュニティ教育センターの見取り図をみてびっくりした。そのセンターは小学校と幼稚園、それに、「大人のハイスクール」の機能を持つものであり、ほかに、公民館・スポーツセンター・社会福祉事務所の機能を併せ持っているという。コミュニティセンターの部分には、多目的利用スペース、老人センター、医療コーナー、家事および職業訓練室、家族用台所などがある。また、レクリエーション部分にはテニスコート、プール、サンデッキ、そしてスナックバーまでが見られるのである。これは、従来の日本の小学校の常識的な建築からは考えられないことではないか。

とはいえ、日本にも神戸市の高倉台小学校のように、地域と小学校が一体となった町づくりが行われているところもある。しかし、それは例外的なものであり、小学校は依然として明治期からの小学校単独機能のスタイルのものが多し。

III 「子どもが生きる」ということ

その頃、書店で、『「子どもが生きる」ということ』³⁾という本を手にした。サブタイトルに「心が壊れる空間・育つ空間」とある。著者は、『「家をつくる」ということ』、『家族を「する」家』な

1) 4小学校とは、大浜小、御供所小、奈良屋小、冷泉小をさす。

2) 倉沢進『コミュニティ論』放送大学教育振興会1998年

3) 藤原智美『「子どもが生きる」ということ』講談社、2003年

どで、住まいと家族について問題提起をし、その後の必然的問題として、「子育て」の問題に行きついたという。その著者が、三冊目の『「子どもが生きる」ということ』において、現在の小学校を建築という視点から分析している。

小学校の校舎の建物はこの100年間ほとんど、変わっていない。つまり、100年間、同じ間取りであったという。明治30年代に明治政府により日本全国に近代的な小学校が、「統一ある教育」を目標に建設された。そのときの「建築」の基本は、まず、西洋風。教室は畳の和室を廃して板張りとし、教室と教室を廊下でつなぐ。それに職員室、校長室を設ける。構成はいまとまったく変わっていないことになる。教室の広さは試行錯誤の結果、4間×5間の長方形（約7m×9m）に落ち着いた。

たしかに、われわれも、親の世代も、子どもの世代もこの明治時代の校舎で育ってきたようである。それでは、なぜこの寸法になったのか。

ふたりがけの机を4列に配置し、ぴったりおさまることを想定して教室の幅は7メートルに、奥行きは教壇から後ろの席まで教師の声が無理なく通るということのできたという。天井までの高さは3メートルであった。この明治末に決定されたサイズがそのまま現在まで持ち越されてきた。

さて、このような従来式の学校建築を「片廊下一文字型」というそうである。一直線にのびた廊下を北側に配置し、それにそって南側に教室がならぶ長方形の校舎。校舎の南側に運動場があるというのが「片廊下一文字型」であるそうだ。日本全国このスタイルで日本人は育成されてきた。

IV 集団と個

この「片廊下一文字型」の教室と席が決定され、1学期～1年間生徒の空間が固定される。空間が固定され、集団も固定されると、教室はそれ自身が「個室」といってもいい性格をもつようになるという。個室とはほんらい一個人のものであるはずだから、「集団でいながら個室で勉強するという矛盾が小学校教育の矛盾そのものであり、クラスター（まとめり）となる」⁴⁾ そうである。農業・

工業が中心の社会では集団主義は生産効率をあげるるので、小学校の「学級」が集団意識をつくる役割をはたしてきた、という。

ところが、60年代の高度経済成長期以降日本人の生活は向上し、住環境も各段に改善されてきた。この時代に一戸の家の見取り図は現代的に多様化することとなる。子どもも80%近くが自分の部屋をもち、すっかり変化した家族関係や食生活の中で、自由な生活をしている。にもかかわらず、子どもが通う小学校は明治期以来の「片廊下一文字型」なのである。

一方で、小学校から高校において、いじめや不登校、学級崩壊など、さまざまな問題が報じられている。建築学的にみると前記の矛盾、つまり、家にいるときの「個人」である生徒の住環境と、学校の教室にいるときの「集団」の中の一人である生徒の住環境の矛盾が、これらの問題行動を生み出している、という。ということは、「いまクラスの運営がうまくいかないのは、社会が集団主義的な教育をのぞんでいないから」ということになる。建築だけに問題があるとは考えられないが、この論法でいくと確かに校舎が、子どもたちの気分、精神性に影響を与えているのではないかと考えることに説得力はある。

V 脱「片廊下一文字型」校舎へ

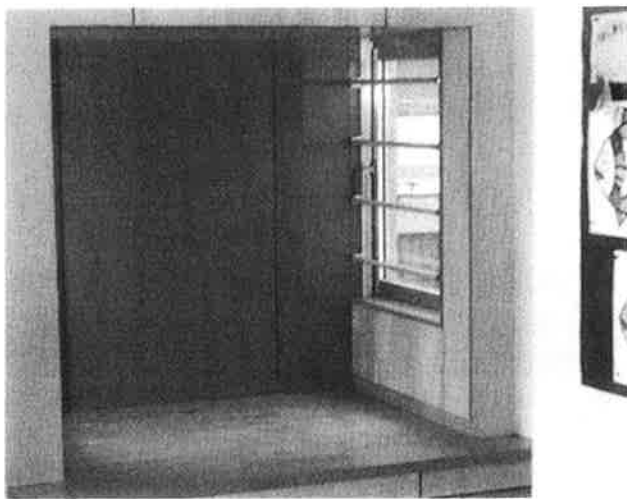
訪問した博多小学校は、まさにこの点に留意した見取り図と建築様式であった。まず、市内バスを降りると近代建築があり、そこが博多小学校であった。バス停の前の校舎には門がなかった。博多小学校には門がない、と藤原氏の著書に書かれていたが、そのとおりであった。遅刻者を閉め出す「時間管理」のための門は必要ないという。以前、校門の門扉に挟まれて亡くなった高校生がいた。学校に門はつきものであるが博多小学校にはないのである。また、地域に開かれた、地域に見守られた学校であるためには塀も必要ないという（もっとも都心の狭い地域であるからコの字型に校舎を配置して塀の役目を果たしてはいるが）。門をなくした結果、遅刻が激減し、おしゃれな校舎に生徒は毎日、うきうきとしてやってくるという。

校舎は地下1階、地上5階の鉄筋コンクリート、

4) 藤原智美P36

全館冷暖房つき、「片廊下一文字型」ではない、ユニークな設計。2～4階のクラスには近代的な外階段から直接はいる。教室はオープン形式で、しきりはあるが廊下はなく、同じ階に教師コーナー・図書コーナー・フリールーム・アルコール（一部くぼんだ小部屋）などがある。実に自由な雰囲気づくりである。また、職員室はなく、ガラス張りの校舎は明るく、見通しがよい。5階にはランチルームもあり、毎日ではないが、給食はそこでとるといふ。何とせいたくなく作りである。

小学校の校舎と運動場を挟んだ向かい側の同じ敷地内には、奈良屋幼稚園・奈良屋公民館・留守家庭学級などがある。また、小学校の2階にはメディアスペース、3階には器楽室、4階にはプール（水深調節可）もあり、これらは、地域に開かれているという。日常的な会議やサークル活動、その他、地域の行事である「どんたく」や「山笠」の練習・打ち合わせなどにも利用されている。



「表現の舞台」（博多小学校パンフレットから）



5階の「外の廊下」、教室と教室をつなく。黒板や石のいすなどもある。

VI かつて小学校は、村や町の中心であった

ここで日本の地域と小学校の関係について概観したい。

明治5（1872）年に学制が頒布され、小学校における義務教育が始まった。しかし、家内労働の担い手である児童を、学校に通わせることに対する反対運動が各地で起こり、近代的な学校教育が定着するまでには長い年月を要した⁵⁾。やがて、政府は日本全国に近代的な学校を建設することとした。明治30年代のことである。しかし、当時の明治政府には日本全国にいっせいに小学校を作る資力はなかった。当初、反対していた村人たちも、小学校をつくるために山から木を切り出し、校舎を建て、屋根をふき、内部の机や椅子も手作りで協力をしたという。以来、100余年の間、小学校は、村や町の中心であり続けた。小学校は地域の核であり、小学校の運動会や行事には地域の住民も参加し、地域の運動会や行事も小学校においてとりおこなわれていた。かつての博多区の小学校も同様であった。

VII はかた再興

平成9年10月7日～15日の西日本新聞に、「はかた再興・都心の過疎を追う」というドキュメンタリー・シリーズが掲載されている。それは、急速に変貌する福岡市の都心で、「過疎」問題がクローズアップされ、取り上げられたものである。人口減少が続き、同市ではじめて4小学校の統廃合に追い込まれたのが博多部であった。長年、山笠など博多の文化と伝統を支えてきた地域だけに、「空洞化」に対する住民の危機感はひじょうに強かった。都心に押し寄せる過疎の波に対し、住民は何を思い、いかなる振興策を講じようとしていたのか。住みやすさを求めての再興策が語られている。

小学校の統廃合が決定されたのは、翌年（平成10年）のことである。新校舎への移転・落成はその3年後であり、それまでは4つの中の1つの小

5) 大隈和雄『日本の文化と思想』放送大学教材1999年 P104

学校にて統合授業が行われた。同記事によると、その平成10年の決定後の5月に大浜小学校で最後の運動会があった。遠藤文次さん(当時77歳)は、「親子三代が1世紀近く通った母校やけんね。やっぱりさびしか」と寂しさを隠せなかった。グラウンドは二人の孫娘が組み体操を披露していたが、広い運動場に2学年合わせても、数十人という光景であった。とすれば、統廃合もやむをえないとは思われるのだが。しかし、メインイベントの「総おどり」になると、子どもを中心に輪は一気に広がり、そこには、地域や世代の垣根を越え、母校への惜別の思いが深く込められていた。このように、統廃合を目前に控えた小学校は、特別の思いを抱く地域の人々により、惜しまれた。

このような地域の人々の思いのうえに、新校舎はつくられたのだ。



校舎の地下にある平和記念室

VIII 夢の校舎と小学生

校舎を案内してくださった教頭先生にいろいろとお話を伺った。その中のいくつかを記したい。一つは財源の問題である。博多小学校は福岡市立である。私立ならば、いざ知らず、他校との調和もあるではないか、と思い、尋ねた。工費は35億円で、通常の1.5倍。4校の統廃合ということで認められたという。もう一つは博多小学校建設の中核の推進者である。このような個性的な校舎を考えたのは、いったいだれだろう。それは、元大浜小学校校長(現博多小学校校長)や教育委員会、そして地域の住民の長い審議の結果であったが、建築家としては、工藤和美という方がチームリーダーだった。後にインターネットで調べたところ、

下田市の博物館・有田陶芸倶楽部・鳥取砂丘博物館・大阪市水上消防署などの設計・建築をされた方とわかった。その工藤氏が「学校も町の一部であるから、地域の人が入れるもの」をつくりたい、と主張されたという。また、「地域に開かれた学校」とは、子どもも地域へ出るし、地域の人をゲストとして招くことができ、公民館や幼稚園を取り込んで一緒にやっつけける学校がのぞましい、とも言われ、それが形となって表れていた。

そのように、「片廊下一文字型」建築を脱した「夢」のような校舎を、小学生たちはどう感じているのだろうか。夏休み中であり、運動場で野球をして遊んでいた子どもたちに聞いてみた。2年生から4年生までの7人の男の子たちだった。「楽しい」、「ランチルームがいい」。でも、「教室が独立していないから、やかましい」、「走ったら、怒られる」などといい、全体としては、「ビミョウ」というはやり言葉が返ってきた。

一見理想的に見える校舎も、利用者からみればやはり「微妙」なのである。担任の先生方にはお目にかかれなかったが、お話を伺えば、また違った意見がきかれるかもしれない。



運動場の野球少年たち

IX おわりに

この報告では、フリント市のコミュニティ教育センターが、単に小学校であるだけでなく大人のハイスクールであり、また、社会教育指導センターの機能を備えているという学びから、国内にも同じ趣旨の学校があることを検証した。現代の学校教育の病理的側面の原因が、教育の制度や運用方法、教師の指導のあり方、人間関係、その他か

ら考察されるのではなく、建築学的に考察されているのがフレッシュであった。

今回は、博多小学校のお忙しいスケジュールの間をぬっての短時間の見学であったので、校舎の見学しかできなかった。もし、できうれば、今度は学校教育や地域の活動について、建築見学ではなく、教育視察として、授業風景やランチタイム風景を見学したいと思った。

博多小学校に興味をもたれた方は、インターネットで「博多小学校」をクリックしてみてください。美しい近代校舎と生き生きした子どもや地域の人々をみることができるようでしょう。

最後になりましたが、お忙しい中、見学を快く引き受けてくださった校長先生と教頭先生にこころより感謝いたします。